

42. 「西区在宅ケア連絡会」の活動について (VII)

～より拡大された地域ネットワークの構築をめざして～

鎌倉嘉一郎*1、坂本 仁*2、伊東宏昭*3、小池忠康*4

はじめに

札幌市西区では、平成9年8月第1回「西区在宅ケア連絡会」が開催されて以来、西区内に居住し在宅療養を希望する人の在宅療養を支援するための連絡調整を目的とした活動が行われている。平成15年12月第68回までの活動結果は今年の札幌医学会で坂本*2が報告した。その後も毎月第2火曜日に開催が周知され、事例検討、ミニ研修会も継続されている。市民のみなさんといっしょに考えるシンポジウム、痴呆への理解を深めるフォーラムも昨年度に引き続き開催された。

平成16年の「西区在宅ケア連絡会」の活動と参加者へのアンケート結果を報告し考察を加える。

対象および方法

平成16年の「西区在宅ケア連絡会」(以下、ケア連絡会と略す)は第69回から79回の11回開催された(手稲区在宅ケア連絡会との合同開催シンポジウムと市民フォーラム含む)。第78回(平成16年11月9日)と第79回(12月14日)ケア連絡会参加者よりアンケートをとって85の回答を得た。

西区在宅ケア連絡会平成16年の活動(表1)

平成16年の定例会は9回開催された。事例検討を毎回1から2事例行っている。事例は医療/介護両事業所から提出され、実際の連携に結びつくこともある。ミニ研修会のテーマは本年は多くの

表1 平成16年(第69-79回)西区在宅ケア連絡会活動概要

回	開催日	出席者数(名)	検討事例	特設および研修テーマ
69	2月10日	29 (a) &	1件	障害者療養者の在宅療養支援について
70	3月9日	57 (a)	2	訪問リハビリテーション(秀友会、赤羽研、札幌市・産PT)
71	4月13日	48 (a)	1	在宅死をめぐる(坂本医師・坂本医師)
72	5月18日	250		シンポジウム「地域で、自分の家で最期まで暮らせますか?」 ～本場に最期を家で迎えるために、あなたはどう考えますか～
73	6月8日	38 (a)		地域における「暮らりの家」(ドイツと日本)、訪問看護アンケート
74	7月13日	49 (a)	2	西区内のグループホーム(115施設)の現状についての報告
75	8月17日	480		西区・手稲区市民フォーラム(痴呆症をさぐるめない) 特別講演「知ってほしい痴呆への取り組み」 薬学リサーチ医科大学・長谷川和夫先生
76	8月14日	55 (a)	1	从立呼吸器療養者の診察(井上病院・森松看護院)
77	10月12日	58 (a)	2	探検・橋下リハビリテーション(北海道医科大学・木下健治先生)
78	11月9日	50 (a)	1	薬剤師による在宅療養指導管理(札幌市薬剤師会西支部)
79	12月14日	70 (a)	2	在宅療養の医療連携とスキミング(小林皮膚科・小林仁先生)

(78回・79回でアンケート実施)

職種の方に興味をもっていただける内容を選択した結果、多岐にわたった。

西区手稲区合同のシンポジウムは、平成15年「住み慣れた地域で一人で暮らすこと」をとりあげたのに引き続き、「地域で、自分の家で最期まで暮らせますか?」と題して人生の最期を自宅で迎えることについて市民のみなさんとともに考えた。

市民フォーラム(西区手稲区ケア連絡会他共催)は「知ってほしい痴呆への取り組み」というテーマで改訂長谷川式簡易知能評価スケールで有名な長谷川和夫先生の講演をいただいた。市民の関心は高く会場が埋め尽くされた。

結果

平成16年度のケア連絡会参加者は8回の定例会で延べ460名、シンポジウム250名、市民フォーラム480名であった。定例会の参加者を職種別にみると、看護師が23%(延べ103名)で一番多く、ソーシャルワーカー13%(61名)、ホームヘルパー11%(50名)、医師10%(48名)、ケアマネージャ10%(45名)と続く。理学療法士6%(28名)、事務職6%(26名)、薬剤師5%(21名)、保健師4%(18名)、歯科医師1%(6名)、介護福祉士1%(6名)、作業療法士1%(5名)、社会福祉士0.4%(2名)であった。

アンケート

[全体の印象] ケア連絡会の全体の印象としては56%が良い、39%が普通であると回答している。2名(2.4%)は改善の余地があるとの回答であった。

[開催の多寡] 87%が現行の月1回のままで良いと答えているが、9.4%は現在の回数でも多いと答えている。2名(2.4%)が開催頻度が少ないと回答。

[内容について] ケア連絡会の内容について66%は現在のままでよい、22%は研修を重点的に行うほうがよいと回答している。事例検討を中心としたほうが良いとするのは12%であった。

[介護保険との関連] このままの内容でよいとする

*1 勤医協札幌西区病院、*2 坂本医院、*3 札幌第一病院、*4 小池外科胃腸科

回答が71%。ケアカンファレンスの場とすることが望ましい29%であった。

[出席してもっともよかったこと] (複数選択) 「新しい情報が得られる」が66%、「研修内容が勉強になる」62%と続き、「医療的な知識が得られる」が40%であった。ケア連絡会の目的でもある「人と人のつながり」ができたことをあげる人も35%いた。

[地域ネットワークの形成] 88%が地域ネットワーク形成のための意見表明をケア連絡会で行うことに賛意を示した。反対はなく、残り12%はわからないであった。

[今後とりあげて欲しいテーマ] (自由記載) ・各職種間をつなぐ話し合い・実際のネットワーク事例について・地域ケア体制づくり、包括的地域ケア・施設介護の現状と問題点や変化・介護保険制度や医療改革にまつわるテーマ・脳卒中、脳外傷と在宅・リハビリ予防医療・痴呆、アルツハイマー・終末期について・口腔ケア・脳梗塞の予防・老老介護について・介護用品・自立に向けた方法・対応困難と思われる利用者への対応・医療に関することなどがあがった。

考 察

ケア連絡会定例会のお知らせはFAXを各施設に送っているだけで特別な宣伝はしていない。第2火曜日18時30分から西区民センターで行われることが浸透しているようである。

参加者の職種は医療・介護それぞれの分野にわたっている。看護師とソーシャルワーカー、ホームヘルパーそして医師、ケアマネージャの参加が多く、実際に在宅医療在宅介護に携わる方々のケア連絡会への期待を感ずる。理学療法士や作業療法士の参加がのべ33名あり、在宅分野へのリハビリテーション技士の進出が進んできたことのあるわけではないと思われる。

アンケートから、参加された方々は日常の仕事(在宅支援)に関して新しい情報を欲していてケア連絡会はその必要性に答えていることがわかる。また、介護保険や医療の今後がどう変化してゆくのかについて情報を欲しておりまた考えたいと望んでいる。様々な状況に対する対応法といった「泥臭い」ものへの希望もあれば、包括的地域ケアをどう構築してゆくのか将来への思いを語ることも

期待されている。

アンケートの自由記載欄には「参加している人が限られているのでもっと増やして欲しい」といった積極的な意見もあったが、「いつも同じ人が話しているような気がする」「医療関係者の発言ばかり」「事例検討が同じところからばかり出ている」など率直な意見もいただいた。全体の印象の質問に対して約4割が「ふつう」と回答されていることも参加者はケア連絡会のマンネリ化を嫌いもっと多くを期待されていることを示している。

アンケート自由記載からお一人の文章を紹介する。「『連携=人とのつながり』という意味で有意義と思うが、職場にもどると忘れてしまうこともある。一人一人の意識で『連携=人とのつながり』ということ浸透させる必要がある。」ケア連絡会において人と人とのつながりができることにより西区という地域全体の在宅療養の向上に貢献できたと思われる。包括的なケアを提供するためには、地域の医療提供者と介護サービス提供者の顔と顔とのつながりによるネットワークは前提とも言えるのではないか。参加者ひとりひとりが連携の主体となれるよう今後もケア連絡会の活動を継続してゆきたい。

今後のケア連絡会のありかたについては、事例検討と研修両方とも発展させてゆくことが望まれているようだ。坂本²⁾が主張しているように¹⁾、在宅ケア連絡会を拡大発展させることが包括的地域ケアシステムの構築につながることを望む。また、市民のみなさんとともに考えることができるような取り組みについてもさらに強めてゆきたい。

結 語

本年(H17年)ケア連絡会は、平成18年介護保険法見直しに向けて『地域「包括」ケアシステムの構築をめざして』と題して一連の取り組みをすることとなった。在宅療養支援のための地域ネットワークの構築をめざした「西区在宅ケア連絡会」の活動が、地域「包括」ケアシステムの基盤となることができるよう、とりくみの輪をひろげてゆきたい。

文 献

- 1) 坂本 仁: 地域ネットワーク形成をめざした札幌市「西区在宅ケア連絡会」の活動について、日本プライマリ・ケア学会誌、27; 129-133、2004